

施設づくりの基本方針

多様な「情報の入口」による活動のサイクルをつくる

小千谷市の新たなまちなか拠点としての本施設は、これまで培われてきた、歴史・文化・自然といった豊富なまちの資源をつなぎなおし、まちの新しい価値を生み出す創造の場となることが期待されています。私達は、誰もがアクセスすることのできる幅広い「情報の入口」をつくることで、市民一人ひとりがそれぞれの興味から出発して様々な情報と出会い、創造し、発信するという活動のサイクルを生み出す施設づくりを提案します。



デジタルと実空間の融合施設の考え方

施設利用を促す3つの「情報の入口(実空間・情報空間・活動)」

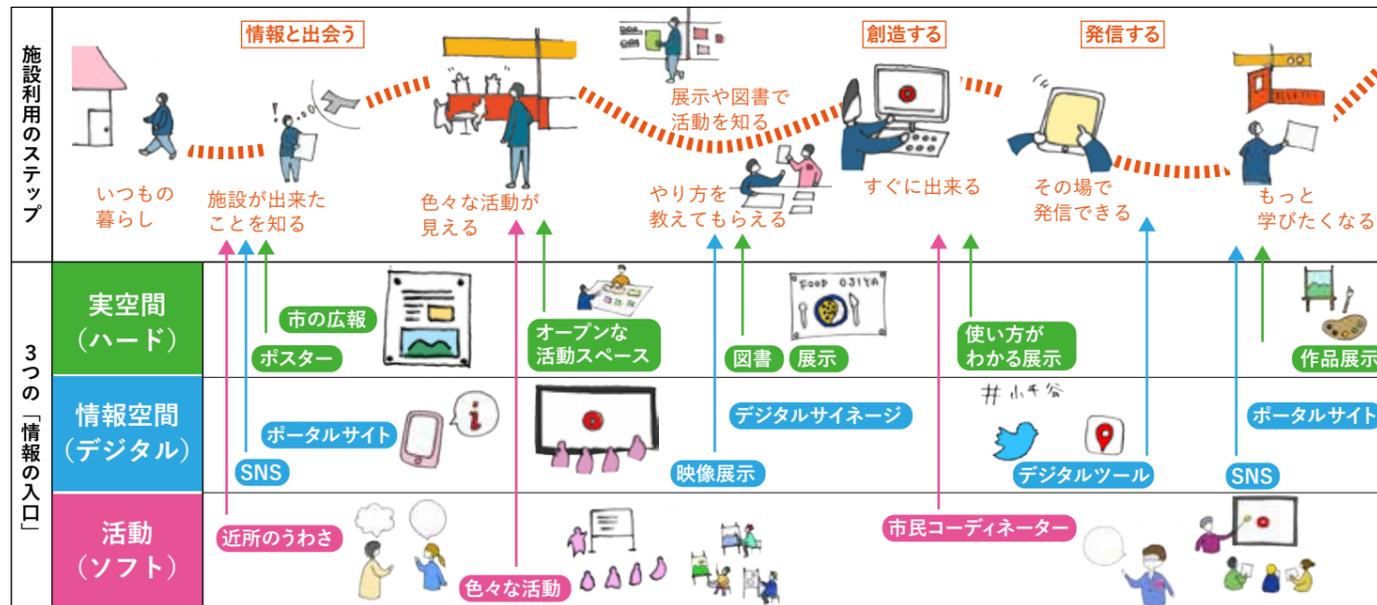
利用者層に応じた興味のきっかけをつくる

小千谷市の老若男女様々な市民の興味に応じた「情報の入口」をつくります。設計にあたっては、下図のように「市民が興味を持って施設を利用するステップ」と「利用をサポートする情報の入口」の関係をつくります。

3つの「情報の入口」をデザインする

- ①実空間 : 建築、図書、展示など
②情報空間: SNS、WEB など
③活動 : 交流、創作、表現など
3つをすべて「情報」として捉え、これらを組み合わせることで幅広い市民が興味を持って利用できるものとしします。

ある利用者の「施設利用のステップ」と3つの「情報の入口」の関係のデザイン例



実施体制・スケジュール

3つの協働の場を実現する多角的なチーム

多角的なチームを構成することにより、幅広い業務に取り組みます。専門性の高い会議から市民に開かれたイベントまで、3つの協働の場を実現します。

A. フレーム会議

担当各課や関係施設等による専門的な会議体。市政との適判断や工程・予算など事業の骨格をつくります。

B. プラットフォーム

小千谷リビングラボと協働してつくるプラットフォーム。具体的な利用想定から、施設検討や運営体制づくりを行います。

C. プレイイベント

参加の裾野を広げるすべての市民に開かれたイベント。開館後の運営シミュレーションとしても機能します。

A. フレーム会議



B. プラットフォーム

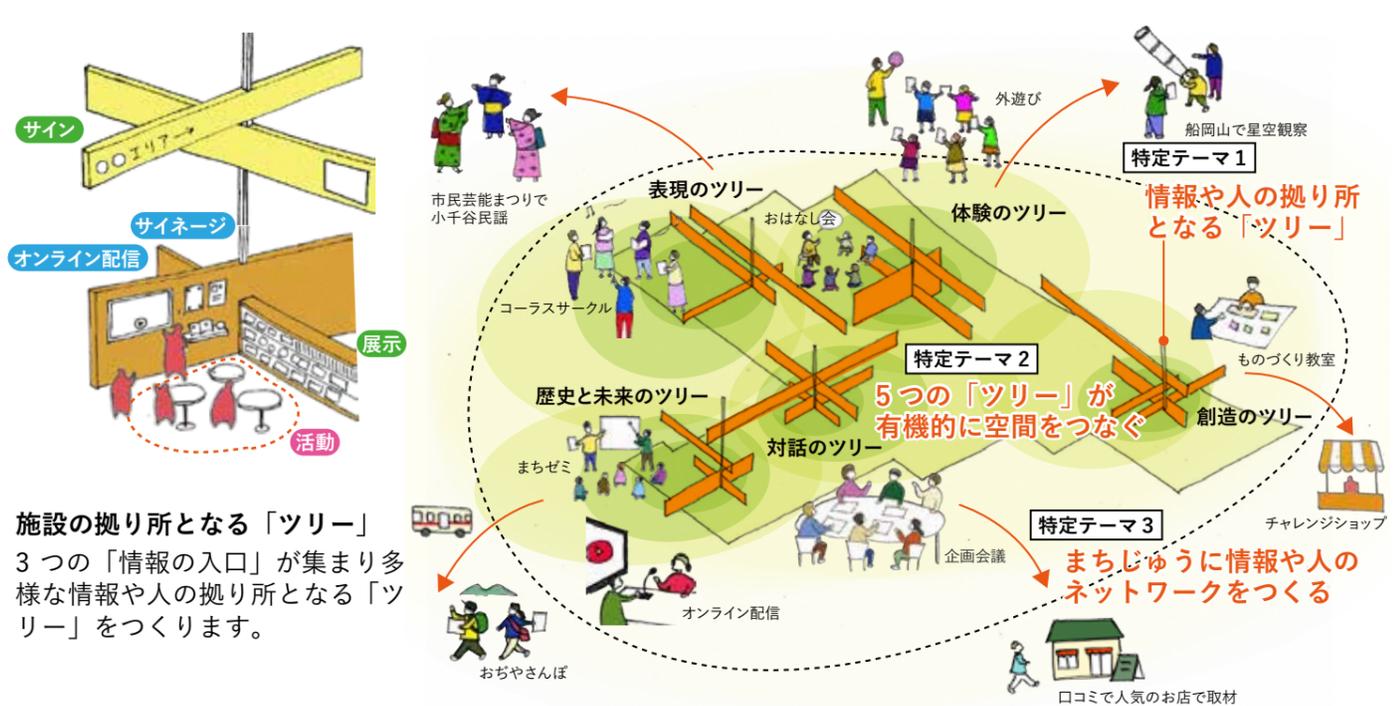


C. プレイイベント



提案コンセプト

3つの「情報の入口」が集まる「ツリー」



施設の拠り所となる「ツリー」

3つの「情報の入口」が集まり多様な情報や人の拠り所となる「ツリー」をつくります。

特定テーマ1 実空間と情報空間の融合の考え方について ▶様式15号

情報や人の拠り所となる「ツリー」

それぞれのツリーは、「オープンな活動の場所」「棚やディスプレイなどの情報を発信するしつらえ」など、様々な情報と人の拠り所となります。

特定テーマ2 配置方針、構造・階数・機能・意匠等建築物の企画について ▶様式16号

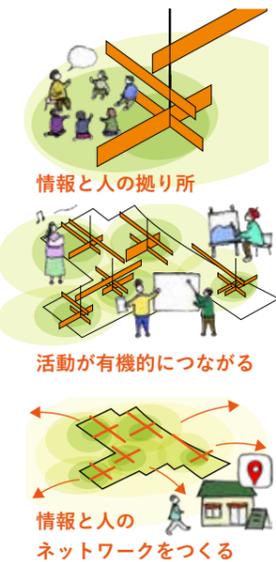
5つの「ツリー」が有機的に空間をつなぐ

5つのツリーをきっかけにして多様な活動の場所をつくることで、それぞれ特徴の異なる場所を生み出し、それらが有機的につながる空間をつくります。

特定テーマ3 施設とまちのつながりに関するビジョンについて ▶様式17号

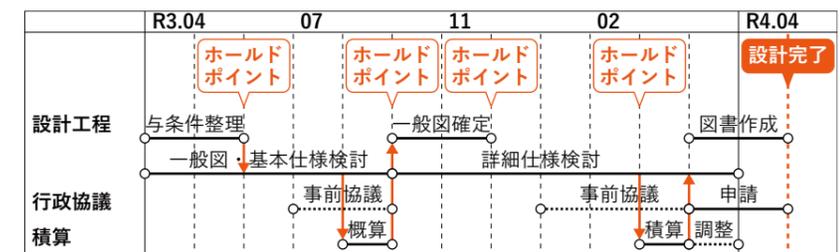
まちじゅうに情報や人のネットワークをつくる

ツリーのまわりで起こる活動が見えることで利用者同士の交流を生み出し、デジタルを併用して、まちじゅうに情報や人のネットワークをつくります。



社会情勢に柔軟に対応する確実な工程管理

業務の実施にあたっては、設計の段階に応じてホールドポイントを設定し、常に関係者全体に明確に共有することで、手戻りの少ない確実な工程管理を行います。日々変化する社会情勢に対して、予め安全な工程管理を行うことによって、適宜見直しを図るなど柔軟な対応が可能になります。

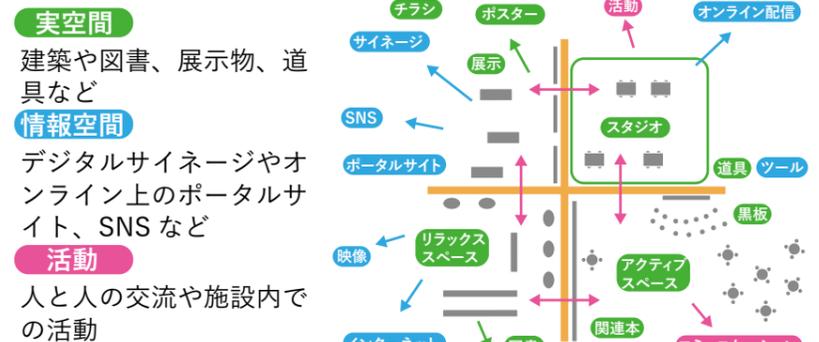


Project team members: 管理技術者 高野洋平, 意匠主任 森田祥子, 情報環境主任 清水淳子, 市民協働主任 三矢勝司. Includes their roles and backgrounds.

多様な情報の入口をつくる融合施設の考え方

「ツリー」を拠り所とした多様な「情報の入口」

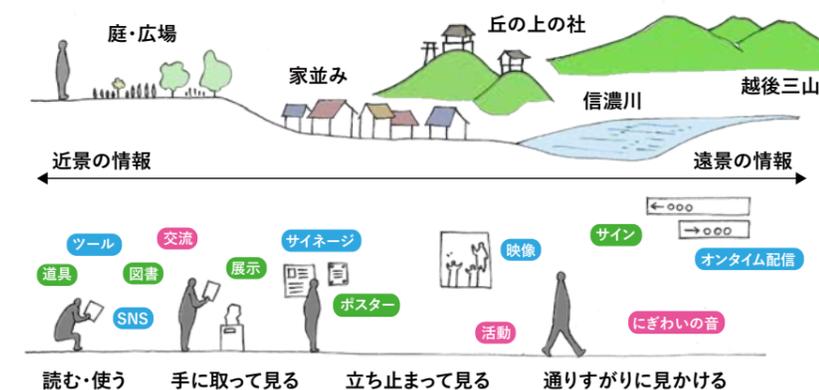
幅広い市民誰もが興味を持って、それぞれの方法で情報にアクセスできる多様な「情報の入口」を備えた空間をつくります。「ツリー」を拠り所として、様々な情報の関わり方の入口となる空間的な仕掛けをつくります。



情報との出会いを生み出す空間の考え方

多様な活動が一望できる空間

小千谷のまちで印象的なのは、小山や神社といった近景から信濃川・越後三山といった遠景までが重なって豊かな視覚的体験を生み出していることです。本施設においても、「手に取ることのできる情報(近景)」から「見て感じる情報(遠景)」まで、様々な情報を一望できる施設をつくります。

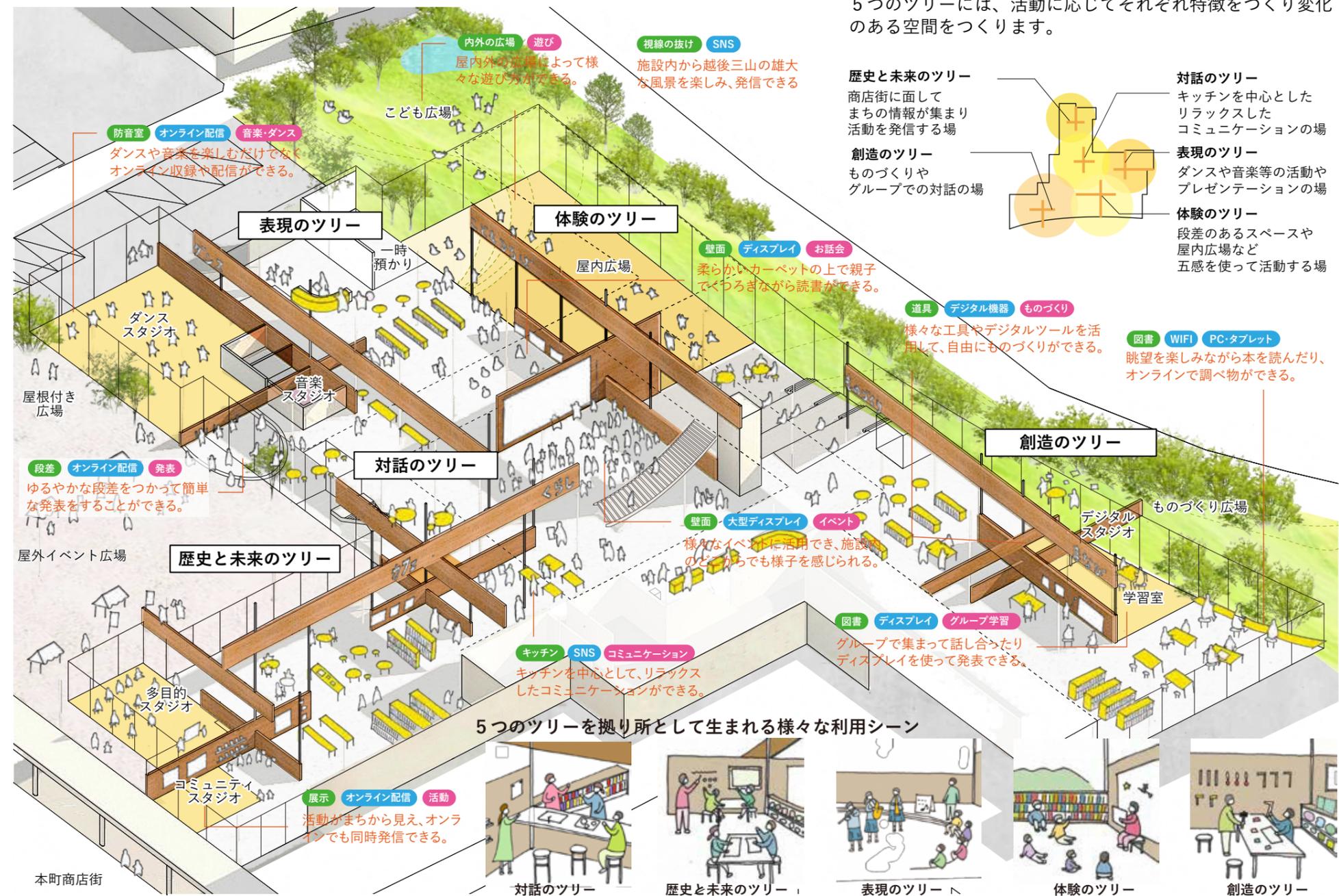


ツリーが折り重なることで、足を踏み入ると、まるで本の目次のように自然に様々な情報が視界に飛び込んでくるような空間をつくります。書架、活動の場所、サイン、掲示物等を、高さや距離に変化をつけて配置することで、様々な情報に自然に触れることができる空間とします。



実空間と情報空間が融合した施設のイメージ

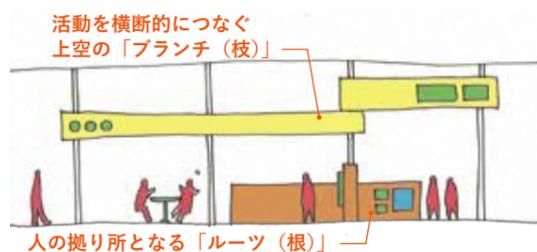
情報や人の拠り所となる「ツリー」



情報空間の骨格をつくる仕組み

ツリーの2つの役割「ブランチ(枝)」と「ルーツ(根)」

高さに応じた活動と情報の拠り所をつくるツリーには高さに応じて2つの役割をつくります。活動の拠り所となる足元の「ルーツ(根)」、活動を横断的につなぐ上空の「ブランチ(枝)」と名付け、それぞれの役割を担います。

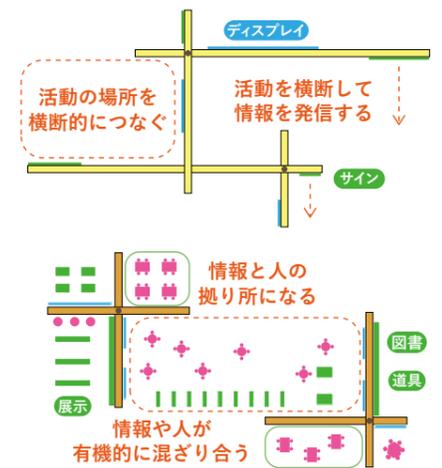


活動を横断的につなぐ上空の「ブランチ(枝)」

上空で大きく腕を伸ばすように延びていく「ブランチ(枝)」は、それぞれの活動を横断的につなぎます。また、エリアのサインやデジタルディスプレイ等情報を施設全体に発信します。

活動の拠り所となる足元の「ルーツ(根)」

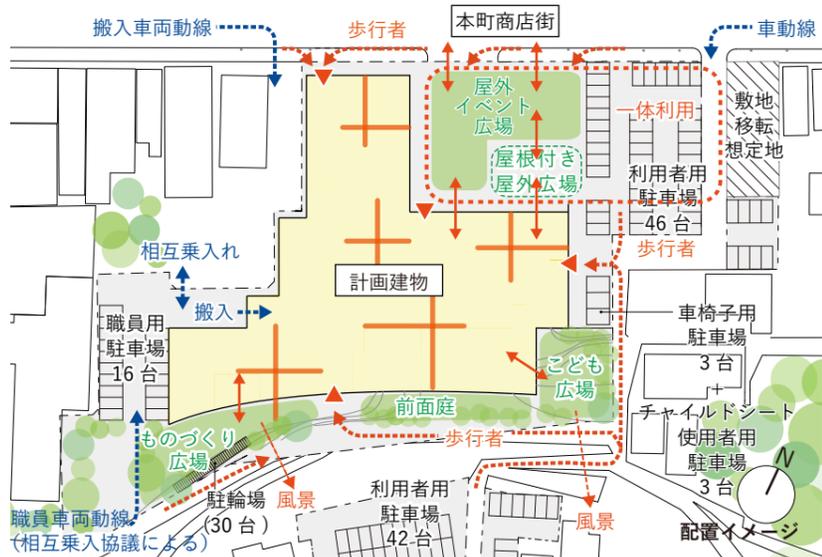
足元に寄り添うように広がる「ルーツ(根)」は、活動の背面や情報の掲示板、本や物を置く棚、など情報や人の拠り所となります。オープンな形状とすることで、それぞれの活動が混ざり合う関係をつくります。



配置計画

まちとつながる配置・動線計画

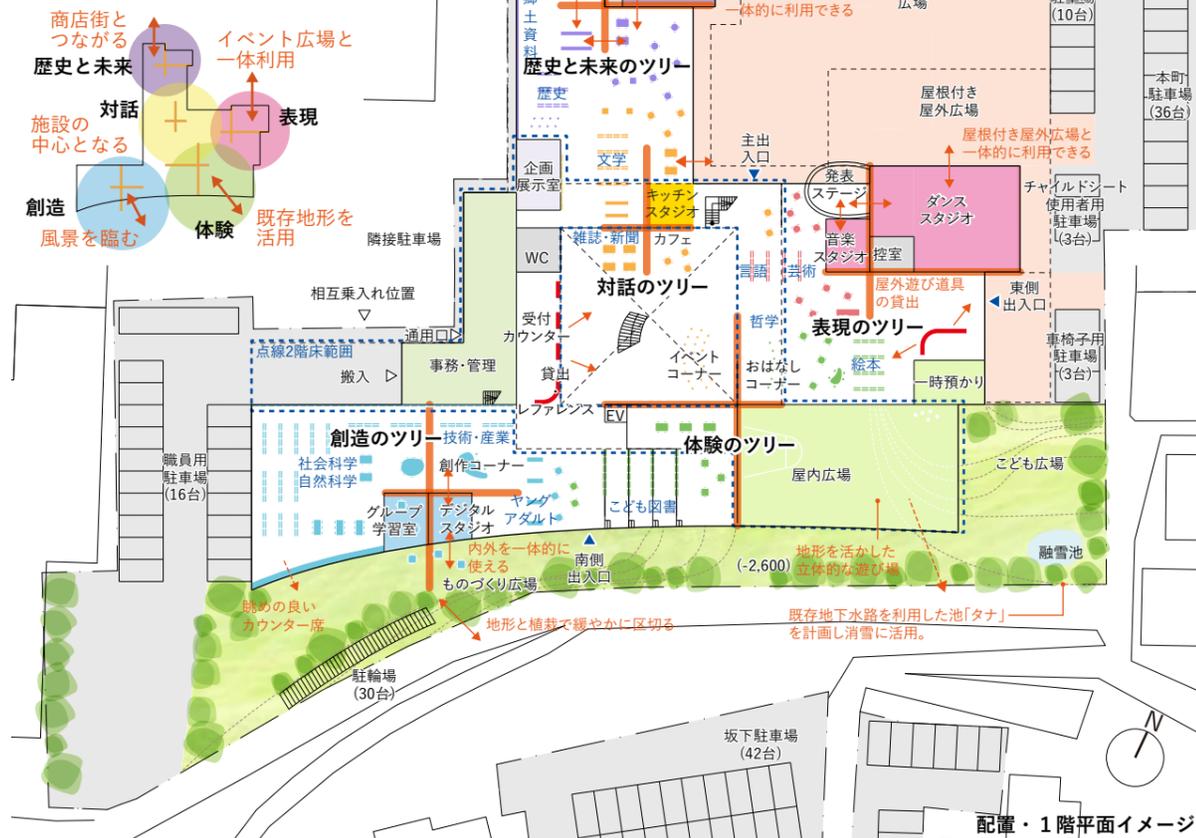
建物の入口は、商店街や周辺住宅地、駐車場といった多方向からのアクセスに配慮し、4箇所に設けます。また車両動線は歩行者動線と分離し、安全性に配慮します。活動に応じてそれぞれの方向に広場を設けます。北東側の広場は、駐車場と一体的なイベントを可能とします。



平面計画

5つの「ツリー」が有機的に空間をつなぐ

5つのツリーを中心として場所の違いをつくり、一体空間の中に様々な特徴的な場所を生み出します。

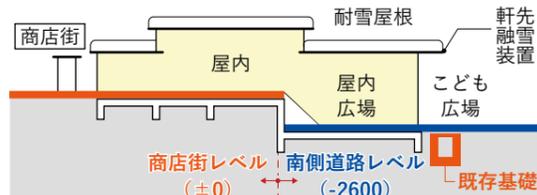


高低差を活かした計画

南東エリアのレベルを一段下げ、高低差のある敷地に寄り添う計画とします。また建物は既存基礎を避けて計画します。

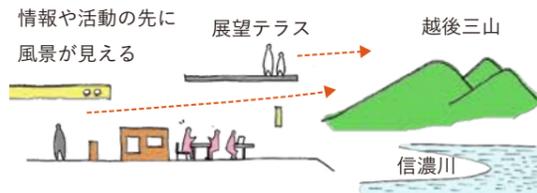
雪に配慮した屋根形状

フラット形状の屋根によって、雪を安全に貯める計画とし、軒先に融雪装置を設置します。



越後三山への眺望

越後三山への豊かな眺望を楽しむことができる視線の抜けをつくります。



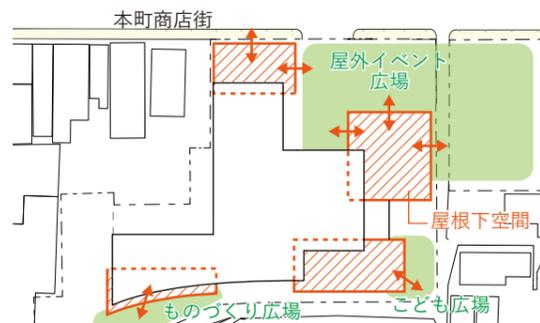
外観計画

風景と調和するおおらかな屋根

活動を一体的に包み込むおおらかな屋根と、下屋を組み合わせ、雄大な越後三山や信濃川への風景と調和した建物とします。

まちとつながる屋根下空間や広場

建物外周の屋根下空間や広場によって、周辺環境と施設の活動の連続性を生み出します。



賑わいがまちにあふれる

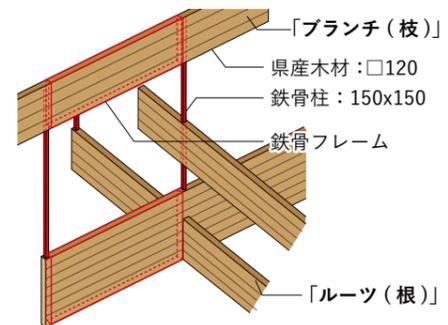
中心市街地に賑わいを生み出すように、内部の活動の様子が見える四周に開いた外観をつくります。



構造計画

開放的な一体空間を支える「ツリー」

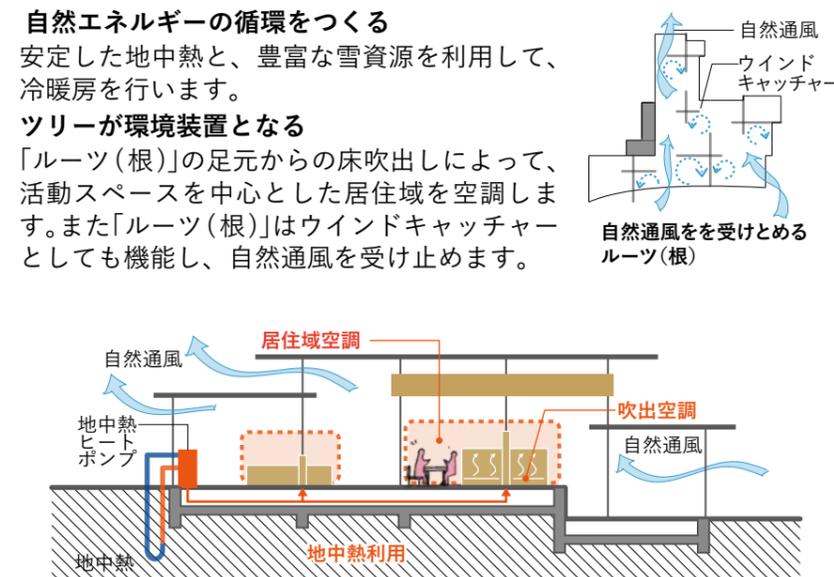
地場産の木材を使用した耐震要素として機能するツリー。平面的にバランスよく配置された5つのツリーは、地場産の流通規格材を組んだパネルを鉄骨フレームと組み合わせることにより地震力を負担します。



環境計画

小千谷の自然環境に寄り添う

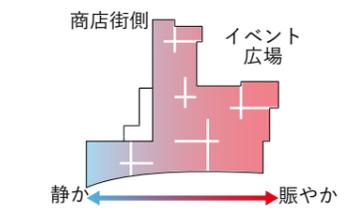
自然エネルギーの循環をつくる。安定した地中熱と、豊富な雪資源を利用して、冷暖房を行います。ツリーが環境装置となる。「ルーツ(根)」の足元からの床吹出しによって、活動スペースを中心とした居住域を空調します。また「ルーツ(根)」はウインドキャッチャーとしても機能し、自然通風を受け止めます。



利用者が環境を選べる空間

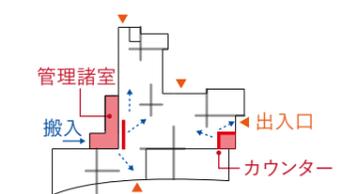
ゆるやかな音のゾーニング

周辺環境とあわせて、にぎやかな空間と静かな空間をゆるやかにゾーニングし、音環境が選べるようにします。



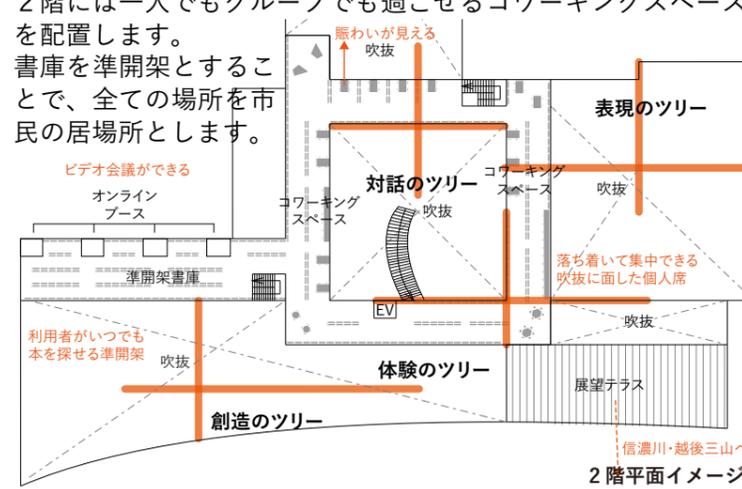
コンパクトな管理諸室

管理諸室は施設中央に集約します。利用者はカウンターから見守られながら安心して過ごすことができます。



賑わいを見晴らすワークスペース

2階には一人でもグループでも過ごせるワークスペースを配置します。書庫を準開架とすることで、全ての場所を市民の居場所とします。



配置・1階平面イメージ

2階平面イメージ

